新　池　御　書

弘安三年一二月　　五九歳

うれしきかな末法流布に生まれあへる我等、かなしきかな今度此の経を信ぜざる人々。抑(そもそも)人界に生を受くるもの誰か無常を免(まぬか)れん。さあらんに取っては何ぞ後世のつとめをいたさゞらんや。倩(つらつら)世間の体(てい)を観ずれば、人皆口には此の経を信じ、手には経巻をにぎるといへども、経の心にそむく間、悪道を免れ難し。譬へば人に皆五臓あり。一臓も損ずれば其の臓より病出来して余の臓を破り、終(つい)に命を失ふが如し。爰(ここ)を以て伝教大師は「法華経を讃すと雖も還って法華の心を死(ころ)す」等云云。文の心は法華経を持ち読み奉り讃むれども、法華の心に背きぬれば、還って釈尊十方の諸仏を殺すに成りぬと申す意なり。縦(たと)ひ世間の悪業衆罪は須弥の如くなれども、此の経にあひ奉りぬれば、衆罪は霜露(そうろ)の如くに法華経の日輪に値ひ奉りて消ゆべし。然れども此の経の十四謗法の中に、一も二もを犯(おか)しぬれば其の罪消えがたし。所以は何(いかん)、一大三千界のあらゆる有情を殺したりとも、争(いか)でか一仏を殺す罪に及ばんや。法華の心に背きぬれば、十方の仏の命を失ふ罪なり。此のを掟(きて)に背くを謗法の者とは申すなり。地獄おそるべし、炎を以て家とす。餓鬼悲しむべし、飢渇(けかち)にうへて子を食らふ。修羅は闘諍なり。畜生は残害とて互ひに殺しあふ。紅蓮(ぐれん)地獄と申すはくれなゐ(紅)のはち(蓮)すとよむ。其の故は余りに寒につめ(詰)られてこゞ(屈)む間、せなか(背中)われて肉の出でたるが紅の蓮(はちす)に似たるなり。況んや大紅蓮をや。かゝる悪所にゆけば、王位将軍も物ならず、獄卒の呵責(かしゃく)にあへる姿は猿をまはす(回)に異ならず。此の時は争でか名聞名利・我慢偏執有るべきや。

思し食(おぼめ)すべし、法華経をしれる僧を不思議の志にて一度も供養しなば、悪道に行くべからず。何に況んや、十度・二十度、乃至五年・十年・一期生(ごしょう)の間供養せる功徳をば、仏の智慧にても知りがたし。此の経の行者を一度供養する功徳は、釈迦仏を直ちに八十億劫が間、無量の宝を尽くして供養せる功徳に百千万億勝(すぐ)れたりと仏は説かせ給ひて候。此の経に値(あ)ひ奉りぬれば悦び身に余り、左右の眼に涙浮かびて釈尊の御恩報じ尽くしがたし。かやうに此の山まで度々の御供養は、法華経並びに釈迦尊の御恩を報じ給ふに成るべく候。弥(いよいよ)はげませ給ふべし、懈(おこた)ることなかれ。皆人の此の経を信じ始むる時は信心有る様に見え候が、中程は信心もよはく(弱)、僧をも恭敬(くぎょう)せず、供養をもなさず、自慢して悪見をなす。これ恐るべし、恐るべし。始めより終はりまで弥信心をいたすべし。さなくして後悔やあらんずらん。譬へば鎌倉より京へは十二日の道なり。それを十一日余り歩(あゆ)みをはこびて、今一日に成りて歩みをさしをきては、何として都の月をば詠(なが)め候べき。何としても此の経の心をしれる僧に近づき、弥(いよいよ)法の道理を聴聞して信心の歩みを運ぶべし。

噫(ああ)、過ぎにし方の程なきを以て知んぬ、我等が命今幾程(いくほど)もなき事を。春の朝(あした)に花をながめし時、とも(伴)なひ遊びし人は、花と共に無常の嵐に散りはてゝ、名のみ残りて其の

人はなし。花は散りぬといへども又こん春も発(ひら)くべし。されども消えにし人は亦(また)いかならん世にか来たるべき。秋の暮れに月を詠(なが)めし時、戯(たわむ)れむつびし人も、月と共に有為(うい)の雲に入りて後、面影(おもかげ)ばかり身にそひて物いふことなし。月は西山に入るといへども亦こん秋も詠むべし。然れどもかくれし人は今いづくにか住みぬらん、おぼつかなし。無常の虎のなく音(こえ)は耳にちかづくといへども聞いて驚くことなし。屠所(としょ)の羊は今幾日か無常の道を歩みなん。雪山の寒苦鳥は寒苦にせめられて、夜明けなば栖(す)つくらんと鳴くといへども、日出でぬれば朝日のあたゝかなるに眠り忘れて、又栖をつくらずして一生虚(むな)しく鳴くことをう(得)。一切衆生も亦復(またまた)是くの如し。地獄に堕ちて炎にむせぶ時は、願はくは今度人間に生まれて諸事を閣(さしお)いて三宝を供養し、後世菩提をたすけ(助)からんと願へども、たまたま人間に来たる時は、名聞名利の風はげしく、仏道修行の灯(ともしび)は消えやすし。無益(むやく)の事には財宝をつくす(尽)に惜しからず。仏法僧にすこしの供養をなすには是をものう(物)く(憂)思ふ事、これたゞごとにあらず、地獄の使ひのきをふ(競)ものなり。寸善尺魔と申すは是なり。

其の上此の国は謗法の土なれば、守護の善神法味にう(飢)へて社(やしろ)をすて天に上り給へば、悪鬼入りかはり(替)て多くの人を導く。仏陀は化をやめて寂光土へ帰り給へば、堂塔寺社は徒(いたずら)に魔縁の栖(すみか)と成りぬ。国の費(つい)え民の歎きにて、いらかを並べたる計りなり。是(これ)私の言にあらず経文にこれあり、習ふべし。諸仏も諸神も謗法の供養をば全く請け取り給はず、況んや人間としてこれをう(受)くべきや。春日大明神の御託宣に云はく、飯に銅の炎をば食すとも心穢(けが)れたる人の物をうけじ。座に銅の焔(ほのお)には坐すとも、心汚れたる人の家にはいたらじ。草の廊(ほそどの)、萱(かや)の軒(のき)にはいたるべしと云へり。縦令(たとい)千日のしめを引くとも不信の所には至らじ。重服深厚の家なりとも有信の所には至るべし云云。是くの如く善神は此の謗法の国をばなげ(歎)きて天に上らせ給ひて候。心けがれたると申すは法華経を持たざる人の事なり。此の経の五の巻に見えたり。謗法の供養をば銅の焔(焔)とこそおほせられたれ。神だにも是くの如し、況んや我等凡夫としてほむらをば食すべしや。人の子として我が親を殺したらんものゝ、我に物をえ(得)させんに是を取るべきや。いかなる智者聖人も無間(むけん)地獄を遁(のが)るべからず。又それにも近づくべからず。与同罪恐るべし恐るべし。

釈尊は一切の諸仏・一切の諸神・人天大会・一切衆生の父なり、主なり、師なり。此の釈尊を殺したらんに、争(いか)でか諸天善神等うれしく思(おぼ)し食(め)すべき。今此の国の一切の諸人は皆釈尊の御敵なり。在家の俗男俗女等よりも邪智心の法師ばらは殊(こと)の外の御敵なり。智慧に於ても正智あり邪智あり。智慧ありとも其の邪義には随ふべからず。貴僧高僧には依るべからず。賤(いや)しき者なりとも、此の経の謂(いわ)れを知りたらんものをば生身(しょうじん)の如来のごとくに礼拝供養すべし。是(これ)経文なり。されば伝教大師は無智破戒の男女等も此の経を信ぜん者は、小乗二百五十戒の僧の上の座席に居(す)えよ、末座にすべからず。況んや大乗の此の経の僧をやとあそば(遊)されたり。今生身の如来の如くみえたる極楽寺の良観房よりも、此の経を信じたる男女は座席を高く居(す)えよとこそ候へ。彼の二百五十戒の良観房も、日蓮に会ひぬれば腹をたて眼をいか(瞋)らす。是たゞごとにはあらず。智者の身に魔の

入りかはればなり。譬へば本性よき人なれども、酒に酔ひぬればあしき心出来し、人の為にあしきが如し。仏は法華以前の迦葉・舎利弗・目連等をば是を供養せん者は三悪道に堕つべし。彼等が心は犬・野干の心には劣れりと説き給ひて候なり。彼の四大声聞等は、二百五十戒を持つことは金剛の如し。三千の威儀具足する事は十五夜の月の如くなりしかども、法華経を持たざる時は是くの如く仰せられたり。何に況んや、それに劣れる今時の者共をや。建長寺・円覚寺の僧共の作法戒文を破る事は大山の頽れたるが如く、威儀の放埒なることは猿に似たり。是を供養して後世を助からんと思ふは、はかなしはかなし。

守護の善神此の国を捨つる事疑ひあることなし。昔釈尊の御前にして諸天・善神・菩薩・声聞、異口同音に誓ひをたてさせ給ひて、若し法華経の御敵の国あらば、或は六月に霜霰と成りて国を飢饉せさせんと申し、或は小虫と成りて五穀をはみ失はんと申し、或は旱魃をなさん、或は大水と成りて田園をながさんと申し、或は大風と成りて人民を吹き殺さんと申し、或は悪鬼と成りてなやまさんと面々に申させ給ひき。今の八幡大菩薩も其の座におはせしなり。争でか霊山の起請の破るゝをおそれ給はざらん。起請を破らせ給はゞ無間地獄は疑ひなき者なり。恐れ給ふべし恐れ給ふべし。

今までは正しく仏の御使ひ出世して此の経を弘めず、国主もあながちに御敵にはならせ給はず、但いづれも貴しとのみ思ふ計りなり。今某、仏の御使ひとして此の経を弘むるに依りて、上一人より下万民に至るまで皆謗法と成り畢んぬ。今までは此の国の者ども法華経の御敵にはなさじと、一子のあやにくの如く捨てかねておはせども、霊山の起請のおそろしさに社を焼き払ひて天に上らせ給ひぬ。さはあれども身命をおしまぬ法華経の行者あれば其の頭には住むべし。天照大神・八幡大菩薩天に上らせ給はゞ、其の余の諸神争でか社に留まるべき。縦ひ捨てじと思し食すとも、霊山のやくそくのまゝに某呵責し奉らば、一日もやはかおはすべき。譬へば盗人の候に、知れぬ時はかしこやここに住み候へども、能く案内知りたる者の、是こそ盗人よとのゝしりどめけば、おもはぬ外に栖を去るが如く、某にさゝへられて社をば捨て給ふ。然るに此の国思ひの外に悪鬼神の住家となれり。哀れなり哀れなり。

又一代聖教を弘むる人は多くおはせども、是程の大事の法門をば伝教・天台もいまだ仰せられず。其れも道理なり。末法の始の五百年に上行菩薩の出世あて弘め給ふべき法門なるが故なり。相構へて、いかにしても此の度此の経を能く信じて、命終の時千仏の迎へに預かり、霊山浄土に走りまいり自受法楽すべし。信心弱くして成仏ののびん時、某をうらみさせ給ふな。譬へば病者に良薬を与ふるに、毒を好んでくひぬれば其の病愈えがたき時、我がとがとは思はず、還って医師を恨むるが如くなるべし。

此の経の信心と申すは、少しも私なく経文の如くに人の言を用ひず、法華一部に背く事無ければ仏に成り候ぞ。仏に成り候事は別の様は候はず、南無妙法蓮華経と他事なく唱へ申して候へば、天然と三十二相八十種好を備ふるなり。如我等無異と申して釈尊程

の仏にやすやすと成り候なり。譬へば鳥の卵は始めは水なり、其の水の中より誰かなすともなけれども、 觜(くちばし) よ目よと厳(かざ)り出で来て虚空にかけるが如し。我等も無明の卵にしてあさましき身なれども、南無妙法蓮華経の唱への母にあたゝめられまいらせて、三十二相の觜出でて八十種好の鎧毛生(よろいげお)ひそろひて実相真如の虚空にかけるべし。爰(ここ)を以て経に云はく「一切衆生は無明の卵に処して智慧の口ばしなし。仏母の鳥は分段同居の古栖(ふるす)に返りて、無明の卵をたゝき破りて一切衆生の鳥をすだ(巣立)てて、法性真如の大虚にとばしむ」と説けり取意。

有解無信(うげむしん)とて法門をば解(さと)りて信心なき者は更に成仏すべからず。有信無解とて解(げ)はなくとも信心あるものは成仏すべし。皆此の経の意なり、私の言にはあらず。されば二の巻には「信を以て入ることを得、己が智分に非ず」とて、智慧第一の舎利弗も但此の経を受け持ち信心強盛にして仏になれり。己が智慧にて仏にならずと説き給へり。舎利弗だにも智慧にては仏にならず。況んや我等衆生少分の法門を心得たりとも、信心なくば仏にならんことおぼつかなし。末代の衆生は法門を少分こゝろえ、僧をあなづり、法をいる(忽)かせにして悪道におつべしと説き給へり。法をこゝろえたるしるしには、僧を敬ひ、法をあがめ、仏を供養すべし。今は仏ましまさず、解悟の智識を仏と敬ふべし、争でか徳分なからんや。後世を願はん者は名利名聞を捨てゝ、何に賤(いや)しき者なりとも法華経を説かん僧を生身の如来の如くに敬ふべし。是正しく経文なり。

今時の禅宗は大段、仁・義・礼・智・信の五常に背けり。有智の高徳をおそれ、老いたるを敬ひ、幼きを愛するは内外典の法なり。然るを彼の僧家の者を見れば、昨日今日まで田夫野人(でんぷやじん)にして黒白を知らざる者も、かち(褐色)んの直綴(じきとつ)をだにも著(き)つれば、うち慢じて天台真言の有智高徳の人をあなづり、礼をもせず其の上に居らんと思ふなり。是傍若無人(ぼうじゃくぶじん)にして畜生に劣れり。爰(ここ)を以て伝教大師の御釈に云はく、川獺(せんだつ)祭魚のこゝろざし、林鳥(りんう)父祖の食を通ず、鳩鴿(きゅうごうさんし)三枝の礼あり、行雁連(こうがんつら)を乱(みだ)らず、羔羊(こうようう)跪(ずくま)りて乳を飲む。賤しき畜生すら礼を知ること是くの如し、何ぞ人倫に於て其の礼なからんやとあそばされたり取意。彼等が法門に迷へる事道理なり。人倫にしてだにも知らず、是天魔波旬のふるまひにあらずや。

是等の法門を能く能く明らめて、一部八巻廿八品を頭にいたゞき懈(おこた)らず行なひ給へ。又某を恋しくおはせん時は日々に日を拝ませ給へ、某は日に一度天の日に影をうつす者にて候。此の僧によませまひらせて聴聞あるべし。此の僧を解悟の智識と憑(たの)み給ひてつねに法門御たづね候べし。聞かずんば争でか迷闇の雲を払はん。足なくして争でか千里の道を行かんや。返す返す此の書をつねによませて御聴聞あるべし。事々面の次(つ)いでを期(ご)し候間委細には申し述べず候。穴賢穴賢。

弘安三年二月　日　　日　　蓮　花　押

新　池　殿